



梅遠如歌集

下

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 函 | 番 | 冊 | 數 | 箱 | 號 |
| 九 | 毫 | 毫 | 貳 | | |

新自一至五
賀四季
哀傷
終

| |
|------|
| 特別 |
| イ 4 |
| 3163 |
| 6(2) |



貴
14
3163
6(2)

拾遺和歌集卷第十一

德一

天曆中時哥合 壬生忠見

あはれなる名もなきに立たわたりて 積りて思ふ

平善盛

あはれなる名もなきに立たわたりて 積りて思ふ

新ら次

貫之

徳一

あはれなる名もなきに立たわたりて 積りて思ふ

あはれなる名もなきに立たわたりて 積りて思ふ

平公誠



はみの中細言のくち所とみくつ

小部宮大政大臣

われひらひらとみくちのあつちをくちをせり

あ

かきつとせうとくちのあつちをくちをせり

あ

あ

あつちのあつちをくちのあつちをくちをせり

あつちのあつちをくちのあつちをくちをせり

あ

あつちのあつちをくちのあつちをくちをせり

あ

あつちのあつちをくちのあつちをくちをせり

あつちのあつちをくちのあつちをくちをせり

あつちのあつちをくちのあつちをくちをせり

あ

あつちのあつちをくちのあつちをくちをせり

あ

あつちのあつちをくちのあつちをくちをせり

あつちのあつちをくちのあつちをくちをせり

あつちのあつちをくちのあつちをくちをせり

わが身を海にまかせしとてはなれどわがわらんといひ
若くはあつたにせしむるは神の御心なりとて
それこそおぼれわが身をまかせしとてはなれど

九條右大臣

さよふらひのぬれはらふは海にまかせしとて

いんげん

おぼれはらふは海にまかせしとてはなれどわが
身をまかせしとてはなれどわが身をまかせしとて

おぼれはらふは海にまかせしとてはなれど

わが身をまかせしとてはなれどわが身をまかせしとて

2

中務

わが身をまかせしとてはなれどわが身をまかせしとて

おぼれはらふは海にまかせしとてはなれど

いんげん

わが身をまかせしとてはなれどわが身をまかせしとて

大原野条乃日しよふとてはなれど

いんげん

一條右大臣

わが身をまかせしとてはなれどわが身をまかせしとて

いんげん

いんげん

さよふらひのぬれはらふは海にまかせしとて

歌一ら原

何れつられ神を志ばらん君はめり公の心ありき
海もわきもやうらゝあ我も誠何よきと君も心は

くさる

ねくおんかぬみかこといふもよこじわをよほ

大書會御神襖も物見侍なら所よきなり

ゆきよきと又乃白つらうき

寛祐法師

何れつられ神を志ばらん君はめり公の心ありき

歌一ら原

くさん

玉すく風流御書下火くみくをきらひのちひき
はくぬかひすきらひのちひきくぬ事しぬ
我もえぬ命つらやいふかあひまひしは
玉のさくことゆわぬいへく渡すわらひと
みちめつらわらぬは君うらひのちひきく

柿本人麿

くす野れ海乃る海ゆかりのちひきく

つゆ

何れつられ神を志ばらん君はめり公の心ありき
海もわきもやうらゝあ我も誠何よきと君も心は

久人

藤原實方親信

つたあまの針はあはれなるにけりて

也

久人

あまの針はあはれなるにけりて

也

あまの針はあはれなるにけりて

也

小野宮大政大臣

あまの針はあはれなるにけりて

也

あまの針はあはれなるにけりて

也

あまの針はあはれなるにけりて

也

あまの針はあはれなるにけりて

あまの針はあはれなるにけりて

天曆寺時宗 中細言親忠

あまの針はあはれなるにけりて

也

あまの針はあはれなるにけりて

也

何事も月日とていふは世にありては
おぼえ候へどもいふは世にありては
余はわが身はわが身とていふは世にありては
つれづれ

大伴百首

源經基

あはれとて思ふは世にありては
あはれとて思ふは世にありては
あはれとて思ふは世にありては
あはれとて思ふは世にありては

つれづれ侍々

つれづれ侍々

あはれとて思ふは世にありては
あはれとて思ふは世にありては
あはれとて思ふは世にありては
あはれとて思ふは世にありては

菅原捕貳

あはれとて思ふは世にありては
あはれとて思ふは世にありては
あはれとて思ふは世にありては
あはれとて思ふは世にありては

歌一八次

一人一七次

後ついでに昔の風情を思ふに
昔を想ふに昔の風情を思ふに

檀中絶言歌集

わんせんの後風情を思ふに
わんせんの後風情を思ふに

檀上二九次

後ついでに昔の風情を思ふに
後ついでに昔の風情を思ふに

一人一七次

わんせんの後風情を思ふに
わんせんの後風情を思ふに

後ついでに昔の風情を思ふに
後ついでに昔の風情を思ふに

一人一七次

一人一七次

一人一七次

わんせんの後風情を思ふに
わんせんの後風情を思ふに

一人一七次

わんせんの後風情を思ふに
わんせんの後風情を思ふに

わんせんの後風情を思ふに
わんせんの後風情を思ふに

一人一七次

わんせんの後風情を思ふに
わんせんの後風情を思ふに

一人一七次

わんせんの後風情を思ふに
わんせんの後風情を思ふに

つまやうにわらふとめはくははわめりけは物致しは
本院より名札のしりとりあてりわらわら

平行時

御まじり給はせまらる衣はれむりゆくわよ無事
本院乃ちんく一のぬれ君よまのわらわら
阿きよ

大納言あよりけ

もていふよと君よと記つるを又いふはぬれ
疑しら次
くえんあより
流し言紋袴はぬれぬるよりらくわらわら
女よりしりとりあてりわら

大納言あより

目くらに物致しはぬれぬるよりらくわらわら
疑しら次
くえんあより

もていふよと君よと記つるを又いふはぬれ
くえんあより

くえんあより
わらわらぬれぬるよりらくわらわら
君より流し言紋袴はぬれぬるよりらくわらわら
女より物致しはぬれぬるよりらくわらわら
流し侍より
在原業平御時

つらとあはれ物紙白雲外とひのたれはるの叙志

女よけりーらり ーらり

つらとあはれ物紙白雲外とひのたれはるの叙志

くえん金とて

かどひのたれと何とれ多し亦曉とよつととくも

うや思ふ物とくふあはれ多し何れもあはれ

くえん金とて何とれ多し亦曉とよつととくも

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

天曆神時奇念 せしとん

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

あはれと

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

あはれと何とれ多し亦曉とよつととくも

あつは津のつり舟の舟に松乃孫あつわつたあつ
忠房のつり舟に松乃孫あつわつたあつ

一巻

大納言

丁度なれ松乃孫あつわつたあつ

也

ひつりし松乃孫あつわつたあつ

あつわつたあつ

一巻

あつわつたあつ

一巻

あつわつたあつ

一巻

あつわつたあつ

あつわつたあつ

あつわつたあつ

一巻

あつわつたあつ

あつわつたあつ

あつわつたあつ

あつわつたあつ

色しす家

とめ乃何とそるまゝあれつらつて物事なればと

歌—ら次 人志る次

風よさし清らつちのまらわつてふし風よ叙れば
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
悉くあつちあつち物とあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

案さ—ゆらそ女乃月夏と乃日あつちあつち
つらつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

らぬ

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

歌—ら次 人志る次

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
案集集和—ゆらそ

源順

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
ゆらゆらあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

はらみあふ御侍々々

一藤橋政

ふれぬうらみ心そらみかまひいせむらひてつれなき

歌一ら次

よん人志次

我が心はともやのまきあひにせむらひの何の無一

少く物といはれずあはれ

こゝしと

系かたき連ぬあはれくもじしひ袖にせむらひ

歌一ら次

よん人志次

はらみあふ御侍々々

なすもわらわら海をあらわく乃長月せむらひの

衣波のぬあはれは海のかかりたるもこのえん

志乃のく物といはれずあはれ

々々

實方明長

ふれぬうらみ物とあはれ袖のあはれはらみ

歌一ら次

大伴方見

磯神あはれは海をあらわく乃長月せむらひの

りこらみ

はらみあふ御侍々々

五月又白わらみはらみはらみ

ちんじんまの原

河をさかしてゐる草の華々として北極の光

たつらす みの原

ひかりをさかしてゐる草の華々として北極の光

るりたる原

ひかりの光の華々として北極の光

起し原 勝観法師

ひかりの光の華々として北極の光

ちんじんまの原

ひかりの光の華々として北極の光

ひかりの光の華々として北極の光

ひかりの光の華々として北極の光

ひかりの光の華々として北極の光

ひかりの光の華々として北極の光

ひかりの光の華々として北極の光

れ

拾遺和歌集卷第十三

恋三

題不知

徳人あはれ

わあはれ山まゝ風とまじふ今更なるまゝの心

今更なる

足あはれ海多るのあはれさる尾のまゝの心

いんあはれ

是の心は美よおの雨雲あはれさる心と君心とを思
可更におの心とけなすまはれ心と君心とを思

そよひのあはれ心とけなすまはれ心と君心とを思

石上し磨

わき山さきとわく霜のうらみあらま地く移さじ

題一ら歌

人ま歌

何事おぼわつひ月とひと今まつひと君とよわく
み月乃まわひんは涙をかく思まを引きさくは

人ま歌

何事おぼわつひ月とひと今まつひと君とよわく

人ま歌

秋乃思月くも君くもわく思くもまねららあつま

園鞆院時山屏風八月十五夜月分地

うまま家おとこ女とく家さく一ゆわ

平色感

秋乃思月くも君くもわく思くもまねららあつま

月乃何くもくも女れりまのうらみ

源さねあま

恋さおれゆきわ次とこころの月と君人さあわ

色一

中務

恋さおれゆきわ次とこころの月と君人さあわ

歌一ら歌

人ま歌

恋さおれゆきわ次とこころの月と君人さあわ

糸子唄よ今とまはしるわらわら
その月乃わわわら

一見人志を教

教を人よわらぬ月新とくはあまの河子思ふ
た一一ら次 つて撫ふよ

てら月と新みまうあはらわらわらわら
月夜乃とく針あまの河子思ふ

つてあま

中宮四侍馬

いよ新つる月乃わらわら
題一一ら次 中宮四侍馬

月新乃乃あまの河子思ふ
新集和ら音 あまの河子

いよあまの河子思ふ
た一一ら次 中宮四侍馬

長月乃乃あまの河子思ふ
月乃乃あまの河子思ふ

あまの河子思ふ
題一一ら次 春宮た道

あまの河子思ふ
一見人志を教

あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに

あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに

あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに

あはれなるにやうに

あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに

あはれなるにやうに

源景明

あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに

あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに
あはれなるにやうに

拾遺和歌集卷第十四

戀心

題云次

人麿

阿き孫のこまればあつふのうきみ
かたはれは
文捕のこまればあつふのうきみ

藤原實方親長

阿き孫のこまればあつふのうきみ
かたはれは
文捕のこまればあつふのうきみ

阿き孫のこまればあつふのうきみ
かたはれは
文捕のこまればあつふのうきみ

なれんかのみ美所よきあらはゆらりよきかへこ
こわなれし
小貳命婦

伊予と常久哉くさんゆか美所記出よる節
歌一ら歌
今更歌

なまより乃わしきよ母さうわ舞と我思ふ今何あはれ
てし海乃野中よあそびし松とよの山にりて歌

よもふとあつたおわわ影はあしとさへ今乃ゆん
浪とよるん梅さうしは浪ひと記さへ成ぬ者あつた

今更歌

まふ鏡よりまきわ花とあさくまきとよ君はゆめ時
なみふのつとあつた梅さうしは浪ひと記さへ成ぬ者あつた

よん今更歌

あつたつとあつた梅さうしは浪ひと記さへ成ぬ者あつた
玉川よりすまひとあつたつとあつたつとあつたつとあつた
あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつた

藤原忠房朝臣

あつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつた
うみ今更歌

伊予のりつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつた

波のよきをみればしるしありてあはれなる

つらね

あはれなるみればしるしありてあはれなる

万葉集和一首ありて

源光朝

なほ海を渡る心成て無きかたはあはれなる

女房のよきありて

藤原惟成

なほ海を渡る心成て無きかたはあはれなる

天曆神時承和歌のよきありて

神のよきありて

無名氏

あはれなるみればしるしありてあはれなる

歌一首あり

いんぎんあり

あはれなるみればしるしありてあはれなる

あはれなるみればしるしありてあはれなる

あはれなるみればしるしありてあはれなる

あはれなるみればしるしありてあはれなる

あはれなるみればしるしありてあはれなる

あはれなるみればしるしありてあはれなる

ていふかゝるおちおちりひつらてまうらわんをせりしむら

人まろ

おかしなわあつてなすはたはたあつてなすきこあつてな

くえんあつて

すこしおちあひひらすは様もあつてあつてあつてあ

ていひはたあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

屏風よみくす野乃くすくすくす

あつてあ

くすくすあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

はらす

天曆御製

せうのなまの物ぶりのつる雲村たはたあつてあ

くすくす

くえんあつて

わあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

わあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

くえんあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

くえんあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

雲井なる人との思ふまゝの事なるかたはよとて
あまのわらひてゝ久しゆなる

人まゝ

よあわらして世村の女をいそふ事なむとてしむるは
あ

歌一ら次

よ久しゆなる

よあはれはらぬる海をわらふ事なむとてしむるは
あ

入道持政のわらひなる事なむとてしむるは
あ

久し

右大将道徳母

歌のひらぬる事なむとてしむるは
あ

歌一ら次

久しゆなる

あまの思ふまゝの事なるかたはよとて
あ

あまの思ふまゝの事なるかたはよとて
あ

今まづら次

あまの思ふまゝの事なるかたはよとて
あ

あまの思ふまゝの事なるかたはよとて
あ

あまの思ふまゝの事なるかたはよとて
あ

今まづら次

あまの思ふまゝの事なるかたはよとて
あ

歌一ら次

よ久しゆなる

あまの思ふまゝの事なるかたはよとて
あ

日福のつとめをいふは年長孫とてあはれいふは
え良の丹、あまの命ぬき物に侍るる時ぞ
いはいらうとて

数あぬきあまのいふはあまのいふはあまのいふは
都くはあまのいふはあまのいふはあまのいふは

あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは
あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは
あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは
あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは
あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは
あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは
あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは
あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは
あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは
あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは

柳かへ磨

つとめは神代はあまのいふはあまのいふはあまのいふは
あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふは

あまのいふは

拾遺和歌集卷第十五

戀五

善祐法師あまのくに侍する時丹の侍

ソトナ

才く渡り安きる見おしきわねのむねおたふさおのし

題一らん

人まほ

住吉姫よじつばわつら侍阿の風を巻後つらぬをな

一人一人

下ふらじ命とて争し乃またわあきあふふの風は縁

あまのくにあそひあそひあそひせしつて物おしわたりし

あまのくにあそひあそひあそひせしつて物おしわたりし

あまのくにあそひあそひあそひせしつて物おしわたりし

あまのくにあそひあそひあそひせしつて物おしわたりし

あまのくにあそひあそひあそひせしつて物おしわたりし

あまのくにあそひあそひあそひせしつて物おしわたりし

あまのくにあそひあそひあそひせしつて物おしわたりし

一人一人

あまのくにあそひあそひあそひせしつて物おしわたりし

あまのくにあそひあそひあそひせしつて物おしわたりし

あまのくにあそひあそひあそひせしつて物おしわたりし

おのれに致すべしとておぼしむるは伏見よりおぼしむるは

おぼしむるは伏見よりおぼしむるは伏見よりおぼしむるは

伏見よりおぼしむるは伏見よりおぼしむるは

おぼしむるは伏見よりおぼしむるは伏見よりおぼしむるは

おぼしむるは伏見よりおぼしむるは伏見よりおぼしむるは

おぼしむるは伏見よりおぼしむるは伏見よりおぼしむるは

おぼしむるは伏見よりおぼしむるは伏見よりおぼしむるは

おぼしむるは伏見よりおぼしむるは伏見よりおぼしむるは

おぼしむるは伏見よりおぼしむるは伏見よりおぼしむるは

おぼしむるは伏見よりおぼしむるは伏見よりおぼしむるは

おぼしむるは伏見よりおぼしむるは伏見よりおぼしむるは

うとくはひのいん事おのめいんおのいんおのいんおのいん

藤原有時

ゆ事おのけあるりいとうねねあわの〇りちあひら

つてあひら

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

人まは

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

いん

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

いん

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

徳景明

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

歌一うら
うえへ

濃波もよきしとあらはれわしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ

梅上高井

黒いよまのうら海つらむとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ

藤原有時

あつらひしつらむとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ

中巻

うらむとくしつらむとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ

題一うら

あつらひしつらむとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ
らふとく物波を食ふとくしつらむ物波をわらわ

延喜式時兼も殿女清の言方わらわ

りしうすのいふにわりのいひゆりるまじいあ

後ひつうくはる 西島殿申御言

今こころいふは海舟の團は若きたるあ物まじいあ

題しうす 一とん入るる

かさわのくがしうめくは後おれんはくわのくはわり

わわのくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

つるまのくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

うえぬのくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

わわのくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

まのくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

ぬのくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

うえぬのくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

小野宮の御言は若きたるあ物まじいあ

兩院大君

意はねくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

題しうす 一とん入るる

わわのくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

ぬのくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

あしうわのくは海舟の団は若きたるあ物まじいあ

くまの海

ふるも物のあはれをいふに
た大匠常しを侍くをれいらか
るーん

天曆神歌

侍りてかきしをいふに
若りしをいふに 平忠依

の事かかして侍りしをいふに
野ーん

侍りしをいふに
侍りしをいふに
侍りしをいふに
侍りしをいふに

侍りしをいふに
侍りしをいふに
侍りしをいふに
侍りしをいふに

侍りしをいふに
侍りしをいふに

侍りしをいふに
侍りしをいふに

拾遺和歌集卷第十六

雜者

影 一 次

凡河内躬恒

妻の思ふ言は流るるくはてしなく世に絶えぬ

一 見 念 志 次

阿比岐の妻は心なほしづかやわが身はこころをわが

新しきまはるは河内守とて萬里を移さるるはわが

小文屏風

右道

三月の月来とてわが心は離れぬとてわが妻とてわが

延喜十五年新院屏風哥

紀貫之

春は龍のうらやみされわじとて物あはまふじ

宵よみんまふまふとわらふまふ乃日おれま

石末の待云任物長乃りしよけらうけ家

中務御具平親王

のまらう君よりいのちを梅乃花とそと物あつ

おらされわらふとまふ乃梅とよみ侍く

贈太政大臣菅

あらあふらひをまを梅乃花あつ物とそとよみ

らうらめは院乃屏風り

久人志ら

梅乃花まをわらふまを梅乃花とそとよみ

新ら次

中納言安陪廣庭

左大下御主人
養老の人の人

いあまわらうとわらふ我宿志とま梅乃花とそとよみ

天曆神時太人新乃よみとそとよみ

こころい乃えとまふとわらふわらふ

乃と

一條抄政

礼乃まわらひとそとよみ梅乃花とそとよみ

新清時梅礼のりしと清乃

治と新宴せとそと給と殿上乃と給とそと

即ち下つわらふりよ 徳寛信朝長 元宗天皇太子 教実親王子

つみかへひわられ梅乃のぬきをきよく海心山にゆ

内裏乃河橋行のありけり

参議休衡

即ちしてさくめよとく物の子つらつれぬんすけ

清和乃七女に六十賀乃屏風

女之集三石大将清和の七女の子息所つふ

清和の女

即ちさきとあつりるきき城より常乃梅をきき教とさ

野一と久 久人志

久よふさたけはきき梅乃のぬきをきよく海心山にゆ

西院院時三入河屏風十二作寄

天九年十月依宣旨より 順集

源順

梅乃のぬきをききとあつりるきき城より常乃梅をきき教とさ

小自川乃山店表乃のりりくききとあつりる

久よふさたけはきき梅乃のぬきをきよく海心山にゆ

右衛門督公任

春乃のぬきをききとあつりるきき城より常乃梅をきき教とさ

梅乃のぬきをききとあつりるきき城より常乃梅をきき教とさ

久よふさたけはきき梅乃のぬきをきよく海心山にゆ

即ちさきとあつりるきき城より常乃梅をきき教とさ

延喜十五年新院屏風上座とよむ寺

弓矢あり

きつづくゆき

馬車ありてその家よりあそび海にひよらぬり引

小一線乃おひつ結ばるりきたのまね障子

くぬふ

盆の湯あられくえゆかきぬらふあつたわらん

山雲まじく人目おのりくむねわくまらんまじり

町まじりくあつたわらん 久人念ふ

町事まじりくあつたわらんまじりあつたわらん

小物まじりくあつたわらんまじりあつたわらん

中書内侍

喜日まじりあつたわらんまじりあつたわらん

女まじりりあつたわらんまじりあつたわらん

藤原長能

香紙まじりくあつたわらんまじりあつたわらん

東まじり二條院註子園融院之後景安女一系院母女院之始中十九日長保三年十二月庚戌

くくまは若くしあつたわらんまじりあつたわらん

右末門督公任

まねくわねくわねくわねくわねくわねくわねくわね

子目

惠慶法師

序奇なりゆき茶の僅馬
みまじりくあつたわらん
まじりくあつたわらん

いさみちの御いし松翁の記といふことなる母の御

叙一原

久人金

おとらせ乃妻の御記といふことなる母の御

新院子日

あさふ

百松乃らせとらまよの御記といふことなる母の御

右大将實資下膳の御記といふことなる母の御

清原元輔

孝宗の御記といふことなる母の御

正月五日人の御記といふことなる母の御

正月叙位乃らせの御記といふことなる母の御

大中臣能宣

松翁の御記といふことなる母の御

正月十一日外官の御記といふことなる母の御

若つらせの御記といふことなる母の御

つらよ

松翁の御記といふことなる母の御

康和二年春の御記といふことなる母の御

蓋の御記といふことなる母の御

つらよ

松翁の御記といふことなる母の御

叙位三もろく誰の御記といふことなる母の御

題一〇六

ふらん何あふあ

こる時程よりくるのれたうけのけくをけりひるめり

帥本字西に記したる親と云ふ乃みよ人かふしはせゆけりなす

弓削嘉言

堂の家おののる人あふれあひさの柳を橋を流

春とよふし即ちふるよつかけらうくくくしを

あこしるの好くは侍をくどつらくあはれしよるそが

いふれなとらうりまわとくくえれ

賀朝法師

春の野よりくるわりのしひつらむらさあふるあふる

題一〇七

ふらん何あふあ

春の野よりくるわりのしひつらむらさあふるあふる

題一〇八

あふりて雪よりきたる人あふれあひさの柳を橋を流

春風を花のあふれあひさの柳を橋を流

みよひ保

あふりて雪よりきたる人あふれあひさの柳を橋を流

ふらん何あふあ

あふりて雪よりきたる人あふれあひさの柳を橋を流

迎春言時月次は屏風のこ

みゆけ

概ねまゝ宿よのわらひもんがき物なきおしりし
はくはる花のさびしき侍るあまの海ともし
侍る人の懐れまほしき侍るようりし
とわらひし侍る

いんかき

御厨子所より飯
及夕御膳供所
より別當預所へ
あり於芥委

よるこふおわい春のさびしき侍るあまの海ともし
みゆけ所まほしき侍るあまの海ともし
乃電ようらまわらぬ
後涼殿の西のひまわり抄云
苑人所別當左大臣より頭預出納
小舎人ホアリ

壬午忠見

よるこふおわい春のさびしき侍るあまの海ともし
わらひのりまほしき侍る

浄道浄流
三善清行息を於
の名僧元亨親と為

延喜帝御名會ニ淨藏初ニテ枕喫ヲナレリ
カヤノコトニテ浄導師ト云ニヤ

あまの海ともし
わらひのりまほしき侍る

延喜
集ニ御院屏風ノ高ナリ
司者ノ人の本ノまは川ノ
松のむら

あまの海ともし
わらひのりまほしき侍る

いんかき

信正通昭

元慶寺

あまの海ともし
わらひのりまほしき侍る

京極浄息不かき侍るあまの海ともし

從三位藤子

本院清光大臣時平女

大和守正八

平之くちりわきつらひのまじりてのち

藤原忠房朝臣

二首トモ忠房ノ歌

鳥のさつらつるよわき野村家乃有まよと花とこを
あはれよとくまひつらつらとてと君よまあねて
ま呼すこます乃野よまよとこあみらててん梅のま
因能院沖時二天沖屏風と花の本流りま
わひまわおむ所 妙詠

帯まき乃ま物守よ地をみくまらまもま
法填云実よ池乃りまの梅花とく見侍
ま

さくられうこぬり教をわらまをまのまをま
上総りのりりてゆるまら源頼光のま
今まけまらまらつらあり

松澤守満侍子

治承元年七十九年

藤原長能

わひまら乃野海の雪ま城まてまわらぬ花の
清填云のまをまらまらまら乃のま
乃花はがわてけくゆるまよあはるま

西園才 字五

ひまらひの梅乃まをまらまのまわらぬ花の
まらまらあはるま 平之くちり

公珠

信あり

菅原捕帖

三位文時子

春風あつたまき久しうかむかひのつゝあつたまき
屏風のあつたまきもつゝあつたまき

宿舎あつたまきつゝあつたまき

延書川時屏風つゝあつたまき

染りハ魚のあつたまき
あつたまきハ川
あつたまきハ川
あつたまきハ川

あつたまきつゝあつたまき

あつたまきつゝあつたまき

あつたまきつゝあつたまき

あつたまきつゝあつたまき

あつたまきつゝあつたまき

一條乃とてん

下はあつたまき
あつたまき

あつたまきつゝあつたまき

あつたまきつゝあつたまき

あつたまきつゝあつたまき

あつたまきつゝあつたまき

如實法師

九条院僧子
元亨教書

あつたまきつゝあつたまき

あつたまきつゝあつたまき

あつたまきつゝあつたまき

あつたまきつゝあつたまき

寛弘元年土月以後不出仕
二年七月廿日上表辞中納言
言初殊加従三位即日
出仕

道長公長徳二年在大臣長和丑
核政

也一

公任朝臣

ゆゑに公のまことしきお花よかみおのくひの都

四月朔日より侍多りしこと

春に郭をくまふ御りおのしづめ志山をわかれ

延長二年の四月廿一日法皇御行幸平賀系御所也

とあのけいこうらうりくろ屏風の奇からの花

いしゆ

松をのふむかきわが地くくく梅くまはすしづめ

延喜寺時を重乃若花の宴せさせ給らむ

殿上御のことし舞うらうらわきり

白太后文極右大臣園章

おら花をのふらよしきさの雲とらをそはやま

た大信ししとゆき中宮御所

屏風 右京門侍公任

後高祖おると所ニハツネニ
天子ノ氣アリテヨロヨロ
ゆきなど文記ヲヒキテ
ニ注ヤリソノヤスハ
仲折ニハ右の美名
と云ふのまことなり

よえんか

しきはらあしけまのちの花まののせよとせりり

かきりく 人まは

郭のつかみぬれ花のうらまわわ若きか

屏風のまよ 重く

寶方朝臣陸奥をせんく
終政公かくしてそつち此
うも彼地まき比の楚
そのくま後よりし
北のこころ
こころのや

卯花のさりのつらさよ
みらねくわくわくつら
きこて
寶方朝臣

ふとみ山くねり
女つりしよあつた
きぬとこを侍く
このこがをく侍くは
えん
高義ら交障より
元輔

あつたわまのこころ
大中長補親

万葉二大伴田村大娘と妹
坂上大娘歌一首

わぬの山影のこころ
坂上高女つら
大伴俊足
あつたあつたのこころ
健守法師

煥夜とほる
延長七年十月十日
しつらつら

しつらつら

あはれまの心持のあはれまの心持

一條持政の山方かよ侍々々々々

謙徳公の北方の三品代明親王の御娘
賜貞后文 懐子 謙徳公の御孫の御孫

あはれまの心持のあはれまの心持

題 躬恒

あはれまの心持のあはれまの心持

古今に大ありなれは其の下のまよあはれまの心持

拾遺和歌集巻之第十一

雜秋

屏風七月七日 源順

荆楚歳時記云七夕陳氏
某庭中以乞巧有燈字
網於壁上則以為得巧
とあり是と心にすこころ
はとふらんや

あはれまの心持のあはれまの心持

あはれまの心持のあはれまの心持

平遙盛

あはれまの心持のあはれまの心持

七夕後朝のあはれまの心持

貫之

たなをたなをみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ
都一ら流 人さ流

まじりてみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ
あまのこころをみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ

天香の書

まじりてみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ
都一ら流 人さ流

天禄四年五月廿一日急難院乃みまわすにせむのほぬらぬらさむらつ
まじりてみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ

月七日のふゆのりゆら大らんあまのこころをみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ
まじりてみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ

元捕

あまのこころをみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ
おのづから時屏風七月七日あまのこころをみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ

源志

あまのこころをみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ
仁和寺時屏風七月七日あまのこころをみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ

日時のちのえー淮南子ニ云鳥獸填河成橋度獄女

三帝ハ武帝ハ天子ハをみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ

まじりてみまわすにせむのほぬらぬらさむらつ

女子内叙

平定文

あかたのりしめ地くせんぬきつら七夕のり衣ふ、無

七月廿七日侍々 藤原義房

秋をきりぬくはあまのくせんふりせよはのせんふん

寂照のり海うしあふりしとて侍とて七月廿七日

あつた侍々よまひのうしあふ

右衛門侍公任

七夕後朝よあつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

天曆神屏風

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

源重之

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

寂照大江定基は名も参議
亦光の子也三河守任よりあつた
とて侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

あつた侍々よあつた侍々よあつた侍々

備心通昭

あまの何よりかたはまの物のついであまの

歌しらん

よみかた

株乃野花のちりてあまの歌よらうとてあま

のれと此野中かよそあまの歌よらうとてあま

園鞆院津屏風よ秋乃野よりあまの歌よらうとてあま

みよめあまの歌よらうとてあまの歌よらうとてあま

平道風

あまの何よりかたはまの物のついであまの

あまの何よりかたはまの物のついであまの

つと梅書

あまの何よりかたはまの物のついであまの

たしらす

あまの何よりかたはまの物のついであまの

うめよ

あまの何よりかたはまの物のついであまの

中宮乃ららあまの歌よらうとてあまの

善滋為政

あまの何よりかたはまの物のついであまの

延喜十九年九月十二日御屏風よりあまの

春ゆのしをり

あまの何よりかたはまの物のついであまの

おは登守保章子
文章博士四位

歌謡流

ミナトウセン エン 涙後、木下周翰注流貞之

うん人あつら

朽恒集 初去カハリ

色しきのぬえあわさるはつとみらさるすはつる舞

月よのあつらつら敵為大しあつらつらわち

く月と見らち あつらつら

あつらつらとれつらつらあつらつらあつらつら

清慎とみ平賀の屏風

ついで

くらの程くらの程のついでついでついでついでついで

ついでついでついでついでついでついでついで

あつらつらとれつらつらあつらつらあつらつら

くまら

あつらつらとれつらつらあつらつらあつらつら

三百六十首乃あつら

くまら

あつらつらとれつらつらあつらつらあつらつら

右大将之團家の屏風

みり孫

あつらつらとれつらつらあつらつらあつらつら

くまら

あつらつらとれつらつらあつらつらあつらつら

古宅に寂庵

古宅に寂庵

煙風一日ふぶきつら道れとふらぬく多つてはか
わら霧のあはれいよの霧のむしむらつらん
り^{母之の涙}と秋りなるあり方たふよまじりて
れめとまじりてあつたよまはあまのそと
さむいまのまわりのこころの霧のよ
ほらとそよよのまじりてあつたよまはあまのそと
あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと
あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと
あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと
あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

廿

秋のまじりてあつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

廿
つて好書

世の今つてあつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

廿
つて好書

あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

辭条
あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

あつたよまのまじりてあつたよまはあまのそと

吹風まわりの物ある菊風れや花をわさるる三葉は

みどりさきこけりおのころは待てるは

きこわらひて侍るをまつるは

老をよむは事ある菊の葉をわさるる三葉は

題一らん 今あり

里記とてのりおのころは待てるは

屏風へおのころは待てるは

今あり

秋あよみあつるおのころは待てるは

延喜寺時月深の屏風乃こ

躬恒

おのころは待てるは

おのころは待てるは

おのころは待てるは

おのころは待てるは

おのころは待てるは

おのころは待てるは

おのころは待てるは

おのころは待てるは

院もは幸
天子行幸とて
みゆきとて

院の御幸とて

申角

小原大政大臣 貞信

春の日の影をさくらわたりつるよみは風をさするに
まじりあり花の影をさくつるよみは風をさするに

大原信能宣

源氏物語の巻のついでに

あつたよみはつらみもまはるのついでに

新しう

うんあつた

鳥のついでにまはるのついでに

みゆみ

春のついでについでに

新院のついでに

あつたよみはつらみもまはるのついでに

新院のついでに 清原のついでに

あつたよみはつらみもまはるのついでに

あつたよみはつらみもまはるのついでに

あつたよみはつらみもまはるのついでに

あつたよみはつらみもまはるのついでに

あつたよみはつらみもまはるのついでに

あつたよみはつらみもまはるのついでに

あつたよみはつらみもまはるのついでに

あつたよみはつらみもまはるのついでに

氷魚使ハ 皇治を
谷上
ひをまらせよの
まらせよ

順業三原任三年廿九男八叔王冲原風のう名アリ

源順

侍之れお察よもさあわぬふ林とてぬささふとつた
十月つづから乃日敵上のおたふとつら
おりてなさりのよとつて

清原元輔

秋もささ秋もあわぬふとつらおたふとつら

時ぬと

さしおふ

とつらおたふとつら神とつら時ぬぬとつら
十月おたふとつらとつら

源順

名後さつらびとあつたおとつらおたふとつら

冬あつらつら^妻あつらつらつらつらつら

はつらつら

さしおふ

さつらおたふとつらとつらつらつらつら

天曆神時侍集り集り集り集り

らつら

中務

あつらつらつらつらつらつらつら

はつら

天曆神制家

さつら名後さつらつらつらつらつら

権中納言義懐入道つらつらつらつら

義徳公の三男正位
中納言三河守寛和三年六月
廿二日花山院御前御録の日
御供入たる御室に在り

義徳の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り
御室の娘の御院に在りたる御室に在り
御室の娘の御院に在りたる御室に在り

三百卒首領也 曾孫好志

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

高岳相如^{スナエキ}家^{スナエキ}及^{スナエキ}冬^{スナエキ}の^{スナエキ}御^{スナエキ}院^{スナエキ}に^{スナエキ}在^{スナエキ}り^{スナエキ}

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

ついで書

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

女系人左近集...
宰相共未嘗...
くそま指...
小豆呂...
のつて...
はし...
御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

十月十四日

御室の娘の御院に在りたる御室に在り

あつたつていふことかきつておぼろげな
あつて

じつものちからをいふことかきつておぼろげな
あつて

拾遺和歌集巻第十八

雑賀

延喜三年五月中宮御屏風之目

紀貫之

あつたつていふことかきつておぼろげな
あつて

屏風
伊勢

あつたつていふことかきつておぼろげな
あつて

九條右大臣平賀屏風之行ある所一花の本

あつたつていふことかきつておぼろげな
あつて

あつたつていふことかきつておぼろげな
あつて

元捕集六きれみ為光
ちいよよこを切とせふ
たれて言よとくいひ
く

二為光よあり元捕集七かゆ
ためおれ乃期れたのわよ為々時らひ
まねをよよきつとこれらまてよつひる哥
とめつひの作れん

くら月紙かそけん物守るくおぼつらのほ州きい結わ

東文乃つあおわのつりてれと三平つとつ
三乗院寛和三年七月十六日十日集りて春宮二とらよきふ又ほの山殿の名取のふわ
みくおとひよひととどかきつとつせ計か

くえん今一は

くえん山殿となりく
若きハ拾ひえてまら
てん板を界つてこれん
ふととりあつくつわ
くえん山殿のふと
をんと春あて
いんひき
うかちわ

若きさ日るひとかつんさるほのふと改みとつひ
か賀屏風人のあり松乃りしとわ泉そとら

貫之

松乃新よつり泉流あるは山寺物紙ぬじとそ

冷泉院ふとらのみあつと海を侍らつとあつと

こせと侍計り たち信

てしらの松よあつとん春とあつとあつとあつと

あつとの音一と侍らつとあ

元捕

まの島のつらお枝ととくあつとあつとあつとあつと

大蔵園草じつこのりあつとあつとあつとあつと

東よりせつら

松乃いさよとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

歌一八八 夕人あつて

我のちりもつらくせしむるまごはあはるるまごなる松とこれ

延喜寺時宗院屏風^{中村せんとりて}

つじ権書

つじ七代高経松とびつしわあ地とつ海や敷きまるとん

人のちりあつてつらまのりつと

こじつささむれひつ雲とまるとるおれ松とるん ^{大徳元年四月九日}

天曆寺時の裏とて為平乃みこころ^{村上守四郎子母九条降捕公女一品式部}御ち侍

春議好古 大貳萬経子後撰池若

長くまよりとせの事おれれつお若とあつしつと

又月あつらひつらとあつらわらあつたはあつたの

こよあつせつらまのこの朝はあつびつあつてつと

春宗末史道總母

等しつらあつてえはつらあつてえはつらあつてえはつら ^{天徳元年四月九日}

天徳元年右大臣五十賀屏風^{つり}

清原元輔

子とそるん若しつらあつてえはつらあつてえはつら

東三條院乃賀方大臣^{侍らつてあつてあつて}

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

右衛門侍云々

文選舞鶴賦三言霜毛而弄影

君毎まじつめひのりけはるむまゝとほつんすん
右大臣家はくありあつたのていよありけのな
わつてりこいまゝとんかゝるせ侍らり
水樹と佳趣とよと
すことひあすまのあらけのふらふら松のげとつせ
あつたのていよありけのな

行中細言敷忠

らせり較の務とをさぬくも物と君とをさぬ
清和の女はみこころ八十賢を明の女は侍
くら時几屏風と舞の君のくありけのな

あり

はゆめ

白雲のうわめせとて母まゝと母のまゝのつとむわ
こはとみんこころもく侍ありとて海青す
え情の子あり
まゝ

右大臣の事ありてはとてみんこころとてん命ありと
中将は侍らり時右大臣源氏ありてはとて
とてとてとてはありてつとてとて

右大臣實資

流儀のなとてありとては

しんがれ新長

ねごとくふれはとてみせ

山くしはのりなる河よのやうにふれりてわ
あはれなるよみらつて侍らる本よあはれは
あまふゆら

春のぬれはあはれはあまふゆら

あまふゆら

春のぬれはあはれはあまふゆら

春のぬれはあはれはあまふゆら

糸後親樹子天授八年在中

藤原忠君親長

あまふゆらあはれはあまふゆら

あまふゆら

あまふゆらあはれはあまふゆら

あまふゆらあはれはあまふゆら

あまふゆら

あまふゆらあはれはあまふゆら

あまふゆらあはれはあまふゆら

あまふゆらあはれはあまふゆら

天曆行製

あまふゆらあはれはあまふゆら

あまふゆらあはれはあまふゆら

あふのくみ 中武本

夏よりあつたてふまにらじ

四のよあつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

一時三四五六七八九

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

刻博士時 あつたてふまにらじ

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

良宗宗貞 遍昭 俗名

夏よりあつたてふまにらじ

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

あつたてふまにらじ

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

灌佛日女御之布能童女
持参殿上人技持加五節

灌佛乃 あつたてふまにらじ

公事根源云フ佛生云ハ推古天皇五十九年
秋如來俱昆藍城ニ生タリト云フ時天
龍下リテ水ヲシキニ故キナリ

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

藤原義教

あつたてふまにらじ あつたてふまにらじ

みまふし... 大将中少將の兵名す

に取一が將の... 武後... 志の... 平公識

あつぬみの... 一... 後...

と... 名... ち... だ...

進書十七年... 紀貫之

橘中丸

あつたさういふかきむすこに
手付しらす
源吉忠朝とてあまの

二月上甲日先赤日使立近赤中將
春日乃使公事根源よりのりてつ
かへくすあつらぬ

はるるるるる 一陳核政

若かきむすこにむすこに
十あつたさういふかきむすこに
大和源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

一見金原

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

春文苑金原

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

あつたさういふかきむすこに
源吉忠朝とてあまの

齊文大津道徳母

くわがふらふらせはあなまのまゝにしてはなれりてはなれりて
新らに

いふことしゆはなれりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて
於芥所三条南所西南北二町大入道殿
東三条よりわがりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて

兼光殿母
證子系系系女

ぬがふらふらせはあなまのまゝにしてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて
よわわがりの所乃ぬがりのなりてはなれりてはなれりてはなれりて

大納言朝光

伊勢一兵衛をわがりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて

中納言平惟仲之
賜三位弥我子
うわがりのなりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて

高階成忠女

あなまのまゝにしてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて

源忠朝女

源忠朝女

いふことしゆはなれりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて

大將源時
小一条正大臣師尹子
あなまのまゝにしてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて

あなまのまゝにしてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて
若草宮内大臣師尹子

いふことしゆはなれりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて

藤原盛女
藤原盛女

あなまのまゝにしてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりてはなれりて

從四位下右近中将長保四年出家入道中納言兼豫州

義懷遠世ノ位所ナリ

歳序朔日法師のまじりていひじろのまじり
く家の家もあつていふことやあつていふこと
なれし時をいふていふ

則忠朝臣

誰か後生死をいふていふ

魂ヲカス

拾遺和歌集卷第十九

雜戀

恋はかたてまはしつゝいふまじりていふ

題不知

掬ひ人死

おろの袖あつていふまじりていふ
いかりまじりていふまじりていふ
ゆゑれ中りていふまじりていふ

車定女

早わ山私乃かすまじりていふ
野一らぬ 掬ひ人死
おろの袖あつていふまじりていふ

童原抄云九年ノ
叶人崇神天白三年
秋九月都下破城三稿
久是焉難宮ト云

延喜式神名帳云稻荷社三座下社大山社
中社倉稻魂上社土祖神

大申臣結實

わきまわらわいぬさしりて人ねが致しんあまら

一平たたるひのし

わきまわらわいぬさしりて人ねが致しんあまら

贈大政大臣 菅 正暦四年上月贈大政大臣

わきまわらわいぬさしりて人ねが致しんあまら

わきまわらわいぬさしりて人ねが致しんあまら

わきまわらわいぬさしりて人ねが致しんあまら

わきまわらわいぬさしりて人ねが致しんあまら

わきまわらわいぬさしりて人ねが致しんあまら

わきまわらわいぬさしりて人ねが致しんあまら

わきまわらわいぬさしりて人ねが致しんあまら

右近

一平たたるひのし
ひのし
下しよんハ双の
孫語り

男ノ故ヲエテ銅ヲ作
リテ神奉ルトナリ

口是を正席の彼時子ヲ諺とナリ
あつたゆき時

贈大政大臣

菅 正暦四年上月贈大政大臣

近江筑前明神

於奈抄云奈々町土御門小浜洞院西

柏森大和

念ふはあはれとて新にあらむも志もなほよふ所なり
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

よるん念ふ所

秋に之をばとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

歌一ら次

相模

梅の葉のさきとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
念ふにゆかりとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

和名嶺ヒヤ空年罪人行也

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

平貞盛ニヤ

さなかりすもゆかりとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

くむとて

ナツロミクシクハ心あまふ

文はつらひのあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

ひくしのじききく つく極書

しよのりあふくあふりおのわふいし余よりあふ
三條の南侍方たふよよいあてあてあてあてあ
あつよあつあつあつあつあつあつあつあつあ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあ

実形 しろあ時あああああああああああああ

新しんあ けんああああ

ハシ馬ハハ馬の想名ナリ
あああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああ

新しんあ

和名城ハ通改買
あああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ

在厚葉平朝臣

筑前
あああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ

あああ 春怒るああ

あああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ

歌一三六

一人女志く此

昔は傳へせまき山のお城に此松のきりこみ
じつはあまのまじりしうみれらりらるる是のよ
昔是のよにふる風のそと縁もれらるる
うみは傳へらるる女志く此

かきり

いはんふき海のお城の入りわらうた神代
ふのりあはるるうみは傳へらるる女志く
とれかきり

和泉太宰府 天曆御製

かしこまらるるあまのまじり
のりようらるる

君代のまじりなつ神代わらうた
あまのまじり

ついで書

田のぼろのまじりなつ神代わらうた
歌一三六

あまのまじりなつ神代わらうた
物下わらうた

みく

海上節女

よせこ夜あつちと海はよと日つらひみんあ
んあくとくさめあちとよあゆのゆめゆるる

よんあ

惠慶法師

あつちあつちとつらぬよすゆらるあ海とつらわ

仁和寺屏風よりあつちゆらるつらわ

大和宮頼基

あつちあつちとつらぬよすゆらるあ海とつらわ

あつちあつちとつらぬよすゆらるあ海とつらわ

あつちあつち

よんあ

あつちあつちとつらぬよすゆらるあ海とつらわ

あつちあつち

よんあ

あつちあつちとつらぬよすゆらるあ海とつらわ

あつちあつちとつらぬよすゆらるあ海とつらわ

よんあ

あつちあつちとつらぬよすゆらるあ海とつらわ

あつちあつち

よんあ

あつちあつちとつらぬよすゆらるあ海とつらわ

あつちあつちとつらぬよすゆらるあ海とつらわ

中納言家持

そこのあはれから日鏡をいひわらふよとれはじとれわらわ
あはれこころのあはれあはれこころわらわあはれわらわあ
つらみきれもつらあつら^{匠者}このあはれあはれあはれ
まきあんなあんなあはれあはれあはれあはれ

あんなあんな

あつらえなまたたけわらわあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれのあはれあはれあはれあはれあはれ
日鏡乃^{朱桂院皇女冷泉院后}あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

ひたしよつもくさくせらる

母寄成つおまき物にありかきつ青草をいじりぬ

川中

しきよいせのふた抱ふあひいもかかみかたあ

歌 ーら次

伊珠

我れあつともあはれつ着の散みよぬいと君もまふぬ

つしりしつるる女の心事とせひのそゆそぬ

一條橋政いんかんとついつらうまもあはれ

うんかんとついつらうまもあはれ

いんかんとついつらうまもあはれ

一葉橋政下川いんかんとついつらうまもあはれ

くもはあはれて物ついでゆるらるすけのまふぬ

ういづいづゆるそなへと御事まうまふぬ

いづつうまもあはれ

中院侍位

う積あつぬことあつらうまもあはれ

歌 ーら次

うんかんとついつらうまもあはれ

みかろあつらうまもあはれつら君もあはれ

君もあはれつら君もあはれつら君もあはれ

逆書行時中文屏風

七集巻ノ五ノ末ノ四
つらとれん人まへまへえん
恨む身まへまへ

絆あひ名ノ景ニ云
繫足曰絆
和名産靈ト
り老神ト

貫之集六延喜二年五月甲寅御座風四月廿二の巻に侍下
太神より三輪ノコト

貫之

あまのつらみよふとてんがらむさそとてのたけのえを
つらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ
あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ

藤原長統

我よりふまわ乃神とつまのれ人のあまのつらみよあまのつらみよ
猶もあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ
あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ

あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ
あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ

和名三實倉倉ノコト三神殿ナリ
彼より我方はあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ
あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ

あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ
あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ

あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ
あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ

あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ
あまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよあまのつらみよ

セノスト云
ツキワシテ
依ニ
セノテノコトニ

拾遺和歌集巻第二十

長傷

清原公息女三人有り
慶子女御朱雀院妃
述子 弘徽殿女御
今一人 大系圖ニアリ

むすれんよぬかあとかれとふらとれまの
ねさうわよさなれをともくつゆのまのいと
のさうゆめともみゆらあり

小野宮大政大臣

清原公

こころ花のまゆかりなるをいとあらばさよふ川口ゆく

平島風

おのころのさけのまゆかりなるをいとあらばさよふ川口ゆく

清原元捕

花の色もやとびに紅くあけぬが物さるる

大中は徳寛

桜花の物さるる花もあけぬが物さるる

大なる事とまはゆるしく候へり

大納言徳寛

春のさきよりわづはほほしほしほしとわづはほほし

中納言徳寛のわづはほほしとわづはほほし

さつりひよほつちあつちよしよしとほつちあつち

ゆきあつちよしよしとほつちあつち

一徳核政

伊りひらひらとわづはほほしとわづはほほし

天曆神門これほほしとわづはほほし
うほつちあつちよしよしとほつちあつち

女苑人無庫

さつりひよほつちあつちよしよしとほつちあつち

水迄九月年道兼公一男
かつちあつちよしよしとほつちあつち

よしよしとほつちあつちよしよしとほつちあつち

栗田右大臣 岡白道兼公

さつりひよほつちあつちよしよしとほつちあつち

右大臣栗田のよしよしとほつちあつち

よりほつちあつちよしよしとほつちあつち

茶目地信ニ
はつちあつちよしよしとほつちあつち
よしよしとほつちあつちよしよしとほつちあつち
よしよしとほつちあつちよしよしとほつちあつち
よしよしとほつちあつちよしよしとほつちあつち

あやしまきくしぬく郭きうくくお乃きわのな
約不乃都試人の評まつますこと

藤原道信朝臣

あやまきくしぬく郭きうくくお乃きわのな
約不乃都試人の評まつますこと
母君のうとくはしつゆなむかぬ女正宮の每八層幅の行息一計り
女正のふれりしとみ 天曆神製

時のふくちのりみら敬まをわつまふのきりつじ
あ乃あつたわてゆくらん此社をせの西じと吹
ゆなれん 大戴國章

おいあつ林のりせのきじらまに妹あはなよひゆき

中宮のつれづれ
中宮のつれづれゆくのりこれ社神おまのあ哉
あつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ

版せよあの草屋神あつちのつれづれあつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ

あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ
あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ
天曆二年八月十五日
東蓮院の神守九日の法事より院の池乃
於芥二三条北末蓮西四町
おい小務あつちのつれづれあつちのつれづれあつちのつれづれ

神中細書敷忠

養育して幸ひ就かち方より他は皆しをわたり

しるしをすべしと云ふは

こぼり大和まほしう

と云ふは

日記とて秘し置かれ或は後ら或は前らに著せしむる
部一ら原 一人の御

公卿とありぬるを事し深き御袖の御目より
眼めさゆると

除服の後と云ふは
河原にて後と云ふ
ありと云ふ

あら後ら御事なるを事し深き御袖の御目より
若後らありおと君より深き御袖の御目より

恒徳の眼めさゆると

京極天皇九年六月
恒徳公ハ謚号アリ

父ノ眼ハ一年ニ眼忌全ナリ

藤原道信朝臣 恒徳公一男

眼めさゆると云ふは

その御事なるを事し深き御袖の御目より

きんせの御事なるを事し深き御袖の御目より

つもくしけ

母ノ乳ニ成長ししを
御事なるを事し深き御袖の御目より

御事なるを事し深き御袖の御目より

大江為基 法名寂定

から後ありしを事し深き御袖の御目より
御事なるを事し深き御袖の御目より

史記ノ...

延暦元年

延暦元年

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年九月十日

延暦元年

ありけのよき風成をほして
 大綱言期光くしめる花山院の女御子
 事とまて侍る侍りて
 多しあまの助らるる
 し
 藤原共の朝長毒

我乃らよれしうたふりて
 如命

うたせよわらふとく
 う見えよよらわぬ
 又れは朝長とまて侍

宇多天皇ノ御子ウミヲ伊勢御息所トシテ
 其ミ子下川トセシメトス集ニカケリ

かせ

ありぬあまの
 伊せくも
 平定文

言不盡理

ありぬあまの
 中納言意捕り
 下よつ

是の御書

ありぬあまの
 ありぬあまの

かゝいよつらん〜きりわらわ

くせん今も

いふせん^(思ふのうら)ふ乃あつこいぬるをいぬるこい
みわこわゆるるのいひわい表すゆわかれ
むらわ秋あきわわよらるとんあきあひて

あかん

春冬衣襟りえらんらんわらわきとほまこい
しよあよとてわらわ

中務

よそあきとつまらあひはりのあつるあきあひ

しまいにいふわらわ

うらあきあきせぬ物あきわらわ
あかんあかん

あきあきついでわらわのあきあきあき

まいにのあきあきあきあきあき

あきあきあきあき

あきあき

あきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあき

あきあき

身邊山ハ
桓武天皇平五城遷城ノ
トキ此地ヲ葬所ト
定メテ延曆遷都
記ニ云クリト河海ナリ

まづせ終く 沖制家 朱雀院

ふきあはれはこころに成りて孫にさそひてあはれを

部一 源 ともかき

やうあふらうわのこころにさそひてあはれを

まじりてあはれをさそひてあはれを

源一 源 ともかき

まじりてあはれを

まじりてあはれをさそひてあはれを

まじりてあはれをさそひてあはれを

まじりてあはれを

古墓何世人不知姓与名よつ了信あり

草月くふをぬれりては^は露のすこふ^は露を

部一 源 沙弥満播

まじりてあはれをさそひてあはれを

忠運南光乃房の末^繪は死人と法師のえりて

あはれをさそひてあはれを

源相方朝臣

あはれをさそひてあはれを

部一 源 清人

あはれをさそひてあはれを

法師よあはれをさそひてあはれを

朱子勸學文
勿謂今日不學而百來日

竹々々

藤原保胤

大内記
法名尊敬

ふにせ然うしうさふさしきあ母あしきふたのし

たうらん

ふんあうさ

夜中車乃ありせしりあひの家とていふまじ

法師あふじとていふるるあ雷乃あふさふ

ふかふかあふさふあてけけあ

藤原高亮

世の中あふさふはふたあふさふあふさふあふさふ

眼あふさふあふさふあふさふあふさふあふさふ

ふあふさふあふさふあふさふあふさふ

あふさふ

藤原のあふさふあふさふあふさふあふさふあふさふ

あ

あふさふ

長保二年二月三日出家

成信重家ら出家

ありあふさふあふさふあふさふあふさふあふさふ

右派門持云住

あふさふあふさふあふさふあふさふあふさふ

か初言藤原統理

と志あふさふ出家

山本福寺三三寺と号

と浪のあふる風の舟もむねのうらむしむらり

東三条院 隆子 是女院のうらむらり

女院御誦捧物まのりてあめりて霞つゆ

女院御誦捧物まのり

女院

ふれくまを巨川の乘流法のまきまよわぬまわり

天曆神時おきまのまは神かきせまを結らん

そくゆらるとまをせ結まをねやうそこのまをま

して神綱浦おまをせ結まの時

神制衣

うらと名もまのいまのまは法のまらあそまのま

為雅親長普門寺まの神信書一ゆらまの

これまの海まのまのうらまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのま

春宮大ま道徳母

まのまのまのまのまのまのまのまのまのま

た大將海時白川まの流神せまを結まのま

實有朝臣

まのまのまのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのま

伽毘羅衛國救尊王ノミニ國ナリ

ひしきよきりも環かいはりて珠のみふはひかづる

元日本紀九二

聖徳太子高皇山宮道カコチテ人乃愛よあつまら母

厭あらんみらのかこわにもせわたりおのりた

まばらさるるさるるゆきすもらとわらあはら

あましくさわくさわくさるるさるるさるる

りら馬らわがりてらあらんかろりよわ梅だ

え後くじらたらう魚の津とぬきとて

ふろくおちりいなさるるさるるさるる

松内

あまのこお山のおまらあまのこわられお

君達母 八子母

ままれくあまのこお山のおまらあまのこわられお

許夜勢百

あまのこお山のおまらあまのこわられお

あまのこお山のおまらあまのこわられお

あまのこお山のおまらあまのこわられお

あまのこお山のおまらあまのこわられお

あまのこお山のおまらあまのこわられお



